

北支建設總署 に赴任したる 三浦七郎博士 と 其 一 行



内務省下關土木出張所長たりし工學博士三浦七郎氏は、先般我が土木技術界と朝野の輿望を擔ふて、北支那臨時政府の重要部門たる建設總署の技監として赴任された。之は我技術界の最も名譽ある赴任である。出發の情況は軍人などの出征に比し頗るヂミなものであつたが、其使命の重大なると、時局的關心の大なる點は頗る意義深いものがある。

建設總署の陣容は『少壯有爲』の土木技術家として軍部から要求されたものである。我土木技術界は平素から社會的には餘り目立たぬ様な仕事に没頭してゐるのであるが、然し所謂『少壯有爲』なる人物は各地方々々に分散してゐる者も多いのであるから、其人選となると容易でない、然も机上の設計理想家でなく、實際仕事に苦勞した経験家から選んだ『少壯有爲』なる土木技術家である。三浦博士の外に四十五名の一行悉くが此條件に當はまつた適仕者である。

此の『少壯有爲』の土木家は一人々々悉くが良く日本の大使命を解して、非常な覺悟を

(北支建設總署技監)
三浦七郎博士

以て此の戦亂の地に乘込んだのである。其一人丈ですら立派な日本人であり、立派な技術家であり、皆立派な地位にあつた人達である。此等の技術家達に仕事を任す軍部も安心であるが、我々日本の技術家仲間としても安心して此壯途を送る事が出来る。

北支臨時政府としても此丈の人物の揃つた技術家を速に迎へる事の出來たのは非常な幸福である。

特に一行の中心人物たる三浦博士は『鋼橋』の大著を有する學者であり、一方又道路、河川、港灣等の實際家でもある。一方には又教育者として日本大學工學校の土木科長として青年學生の信賴的であつた。而して三浦博士は平常から青年學生に對し「東洋平和の爲

ならば』と云ふ歌の意味を徹底さしてゐたとの事である。三浦博士は北支出發に際して次の如く述べられた。

我日本は少くも東亞の盟主となつて東洋の人類を救ひ進んでは世界を救つてやらねばならぬ大きな理想を持つた國であります。(中略)中國の安定と防共提携の一線に沿ふて成立せし支那の新政權に對しては國を擧げて之を援助し今後の成長發展について全面的支持をなす事は日本國民の當然の義務であると信じます。(中略)

私共は選ばれて我國家の義務を果す可き一つの任務を負はされたのでありますが、近代支那は多年の内戦と苛斂誅求の爲農村は疲弊し、産業は萎縮し、交通不整、治安は維持されず、國家も人民も共に塗炭の苦みにあへてゐるのであります。(中略)

私共は先方に參りまして北支那住民の不安を可及的速に除去し、其福祉を増進する傍ら治安工作上必要なる土木事業を行ふ事を急務と致しますが、又一方東洋文明の發祥地として興亡數千年の夢を乗せつゝ黙々と流れる大黄河、其他の白河、永定河の改修に、塘沽の築港、運河の開闢、道路の築造、灌漑工事等我等の解決を俟

つ土木工事は山積して居ります。

懸軍萬里の征旅にあつて勇戦苦闘されてゐる皇軍將兵の代りに我々は技術を以て支那を指導し、茲に文明を創設して日本國民としての責任を果さんと覺悟したものでありまして、固より一身上の都合、家庭の事情等一切を顧みないで勇躍赴任する積りであります。(下略)

堂々たる門出の言葉である。此熱烈なる信念と人格の下に集つた四十六名の『少壯有爲』なる日本の技術家よ。

今や支那敗兵の毒皿主義の黄河堤防破壊の爲には世界の言論も人道的にさへ動いてゐるが、然し白人文明の人道など言ふものは餘り信頼價值のあるものでないが、此の堤防破壊ヶ所に應急工事を施すべく、飛行機で視察した本莊秀一技師の六月二十八日夜の北京からのラヂオ放送は、戦禍中の支那民衆に對する同情に満ちた堂々たる放送であつた。我等は四十六技術共一行の勞を謝しつゝ其目的達成の爲に建在を祈るものである。

因に北支建設總署の組織は次の通りである。

北支建設總署の組織

建設總署 署長 技副署長	總局參事	局長(支)	局簡薦	文書科	科員	支日	一	(科務員)	支	二
				會計科	科員	支日	一	(科監秘書)	支日	二
				警備科	科員	支日	一	(科務員)	支日	一
				庶務科	科員	支	一	(科務員)	支日	三
				工務科	技正	支日	一	技士	支日	二
				調査科	技正	日	一	技士	支日	一
				庶務科	科員	支	一	(科務員)	支日	二
				河川科	技正	支日	一	技士	支日	三
				庶務科	技正	支日	一	技士	支日	一
				庶務科	科員	支	一	(科務員)	支日	一
				技衛科	技正	支日	一	技士	支日	二

計	七七	支 四六		八	支 八	日 三	一	科 支六		二〇	(科員)支一	
		日 三一	支 四					日 三	日 三		支 五	支 二
濟南水利工程局 局長(支) 參事(日)	}	庶務科長(支)	科員	支日	二	事務官	支日	四二				
		工務科長(日)	技正	支日	二	技士	支日	四二				
		濟南出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		開封出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		徐州出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		庶務科長(支)薦	科員	支日	一	書記官	支日	二二				
		工務科長(日)薦	技正	支日	一	技士	支日	四四				
		北京出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		天津出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		石家莊出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
北京公路工程局 參事(日) 簡又薦	}	滄州出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		庶務科長(支)薦	科員	支日	一	書記官	支日	二二				
		工務科長(日)薦	技正	支日	一	技士	支日	四四				
		太原出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		○陽出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
太原公路工程局 局長(支) 參事(日)	}	長治出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		庶務科長(支)薦	科員	支日	一	書記官	支日	二二				
		工務科長(日)薦	技正	支日	一	技士	支日	四四				
		濟南出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
濟南公路工程局 局長(支) 參事(日)	}	德州出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		庶務科長(支)	科員	支日	二	書記官	支日	四二				
		工務科長(日)	技正	支日	二	技士	支日	四二				
華北水利工程局 局長(支) 參事(日)簡	}	天津出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	
		石家莊出張所	技正	支日	一	書記官	支日	一一	技士	支日	四四	

而して三浦博士と共に建設總署に赴任された人々及其部署のうち主なるものは次の如くである。(括弧内は前職名)

建設總署

建設總署技監(内務技師下關土木出張所長) 三浦七郎

公路局

參事 江守保平(滿洲國)工務科長 小澤久太郎(土木試験所技師) 調査科技正 佐藤寛政 (土木試験所技師)

水利局

參事 本莊秀一(滿洲國) 河川科長 立神弘洋 (東京土木出張所技師) 河川科技正 秋草勳 (東京土木出張所技師) 港灣科技正 山田正平 (下關土木出張所技師)

都市局

參事心得 山崎桂一(滿洲國) 技術科長

鹽原三郎(東京都市計畫地方委員會技師) 都市局技正 竹内修 (京都都市計畫地方委員會技師)

濟南水利工程局

參事 平尾勝(内務省土木局技師) 工務科長 小山猛三(大阪府技師) 濟南出張所技正 柳井三郎(石川縣技師)

北京公路工程局

參事 田寺元治(山梨縣技師) 工務科長 佐野俊男(東京府技師) 工務科技正 猪瀬寧雄(千葉縣技師)

濟南公路工程局

工務科技正 笠原昌春(愛知縣技師) 濟南出張所技正 望月一輔(下關土木出張所技師)

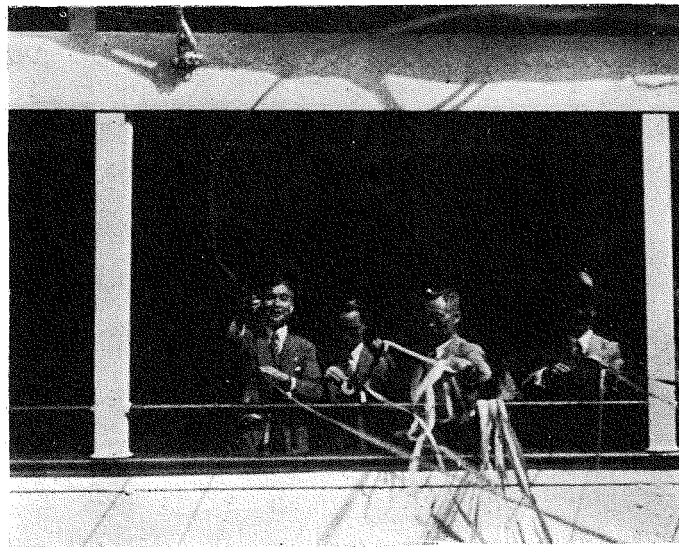
華北水利工程局

工務科技正 澁谷和夫(青森縣技師) 天津出張所技正 畑中次雄 (名古屋土木出張所技師)

釘宮所長の渡米

鐵道省下關改良事務所長釘宮馨氏は關門海底隧道工事に使用すべきシールド調査及其他の用務を帯び六月一日横濱出帆の秩父丸にて米國に向け出發された。(寫真左端)

滯米中は主としてニューヨーク市のイースト・リバーの河底隧道工事を視察し、約2ヶ月間を其シールド工事専門に見學調査し、其後約1ヶ月間の各地用務を終へて歸朝の豫定である。同行者は下關改良事務所の齋藤眞平、小竹雄の兩技手で、兩氏とも土木と機械のエキスパートであるから、今回の釘宮氏一行の視察調査は短



期間にも拘らず多大の成果を期待されるものである。

(寫真は横濱出帆の秩父丸にて)